

はこだて たてものがたり

向田 薫 / NPO法人はこだて街なかプロジェクト



交錯する二つの思い / ザ・グラススタジオイン函館 (函館市末広町)

函館ベイエリアの一角で美しいガラス製品を制作・販売する「ザ・グラススタジオイン函館」は、1910(明治43)年に海産商の倉庫として建てられた。レンガ造、屋根は瓦葺きの寄棟造で、軒蛇腹と出入口のアーチ型が特徴的な洋風建築である。

この建物を語る上で欠かせない人物と施設がある。建物の所有者・陳有崎(ちんゆうき)と、店主のガラス工芸作家・水口謙

(みずぐちはかる)。そして、2人が出会った同じレンガ造の商業施設「函館ユニオン・スクエア」(現「はこだて明治館」、函館市豊川町)である。

レンガ造の建物

ユニオン・スクエアは、1911(明治44)年に函館郵便局として建てられた倉庫を改装し、建築、デザイン、工芸など

の若手クラフトマンの活動拠点兼ねて1983年に開業した。函館が今ほど観光化されていなかった80年代初頭、新しい感性と洒落た雰囲気は住民を魅了した。古建築を市民がよみがえらせるなど当時珍しく、手ごたえを得た若者たちは施設内のバーでまちの在り方を熱く語り合ったという。

陳と水口は、ともに開業時からテナントだった。骨董品などを扱う店を出した陳の本業は不動産業。1980年代後半のバブル景気の頃は、古い建物を壊してマンションなどを建てる動きに違和感を覚え、後世に残すべきと判断した建物を取得して、改修後に貸し出した。「生まれ育った函館の趣ある街並みに興味があった」と淡々とした口調の裏側に強い意志が垣間見える。

時代の熱気

一方、水口は歴史的な建物にはさほど興味がなかった。

砥部焼で知られる愛媛県生まれ。大阪の硝子製品製造会社を経て1979年、仲間6人で

小樽に「ザ・グラススタジオ」を設立した。職人がガラスを吹いてタンブラーなどの商品を作る姿を客に見せる「工房兼ギャラリー」というスタイルは、当時は斬新なものであった。

その4年後、ユニオン・スクエアの開業に合わせて、水口は自ら函館に移ってきた。小樽時代と同じ「制作風景を見せる」スタイル。吹きガラスの体験も

風格あるレンガ造の「ザ・グラススタジオイン函館」の前に立つ水口謙



できるようにして、ガラス製品を函館土産の一つとして定着させた水口は、1992年、スクエアからの移転を決意する。移転先を陳に相談したところ、ちょうど海産商の倉庫を借り受けた陳が「改修するからそこへ入れ」と水口を誘ったのだ。2人はそれほど親しい間柄ではなかった。それでも移転先を陳に相談する水口と、改修費を出して水口を誘致する陳の関係が面白い。ユニオン・スクエアに充満した時代の熱気を体感した二人の、関係の妙だろうか。

火を焚いて

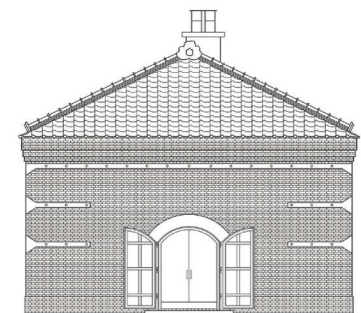
概して、歴史的な建築物の再利用は我慢を強いられる。レンガ造で冬の寒さは耐えがたい。しかし、窯の火を絶やさないガラス作りの仕事では、寒さを感じることはないという。レンガ造は火事の心配も少ない。「火を焚くことで、この建物が活き

てくる」。30年以上、この建物を使い続けて来た水口の言葉には重みがある。

1859(安政6)年に国際貿易港として開港した函館は、三方を海に囲まれ、海からの強風で大火に悩まされてきた。港周辺の倉庫は耐火性が課題であった。中でもレンガ造が多用されたのは、海風による塩害への耐久性からだと推察される。1905(明治38)年の日露戦争終結後、函館港は海産物など

を保管する重要な基地となる。グラススタジオは、そんな時代の中で建てられたのだ。レンガの長い方向(長手)と短い方向(小口)を一段ずつ交互に積む「オランダ積み」で造られている。

「街並みを守りたい」と考える陳と、「生活の中に良質のガラスを」と願う水口。二つの思いが交錯する古いレンガ造の建物で、水口は今日も窯に火を焚いている。(敬称略)



DATA

建築年 / 1910(明治43)年
構造 / レンガ造平屋
延べ面積 / 115.70㎡
様式 / 洋風建築、瓦葺き屋根寄棟造

写真 / FOLPHOTO 水本健人



※「はこだて街なかプロジェクト」のホームページに、この連載のサイドストーリーを掲載しています。